

コーンスープ啜る十二月八日かな 貞勝

12月8日は太平洋戦争の開戦日である。植民地戦略を着々と進めていた欧米列強によって後発の日本が戦争に追い込まれたのだとする、大東亜戦争肯定論の是非はともかくとして、国運を賭して連合艦隊の艦載機が真珠湾の米国艦船に奇襲攻撃を開始した日である。軍人、軍属、民間人を含めて数百万人が殺傷され、主要都市が完膚なきまで破壊された。歴史に「もしも」という仮定・虚構は許されないのであるが、もしも、軍部独裁の神国・日本があのまま戦争に勝利していたら、今の自由な(無責任とも言える)政治体制の存立が許されたであろうか、また、洋行帰りと称する一部特権階級に属する者だけでなく、国民のあらゆるレベルにおいて深く浸透した生活スタイル・思潮の欧米化は、果たしてあり得たのだろうか。

開戦日にコーンスープのカップを手にあためながら、作者の想いはあれこれと錯綜するのである。

嫁がせて独り言増ゆ枇杷の花 友子

これは矢張り父親でなく母親ならでこそその感慨である。実家にいた頃のお嬢さんとお母さんとの間には、単なる親子以上の親密な人間関係ができており、些細なことであってもよく話しが弾んでいたであろう。日本の伝統的な父親像は、寡黙であっても子供のことを常に見守っている静的な存在であるのに対して、母親は能動的で多弁であり、母娘が一旦、勢いよく話し出せば、父親がそれに割って入ることは難しい。

そのお嬢さんが良き伴侶と出会って手元から離れてしまった。娘を嫁がせたという安堵感の後に、なんとも言えない寂しさが、あたかも潮の満ち来るようにその身をひたひたと包み込む。話し相手の一人が傍にいないということを、「独り言が増えている」と表現することによって、現在の心境を如実に表している。枇杷の花との配合が効いている。

千両や小鳥呼び込む実の赤き 溪水

千両の実が赤いとするだけでは、当たり前であり、新しく発見された事実の提示はない。作者は、その実の赤さによってこそ小鳥が引き付けられるとしたのである。冬枯れの寂しい色に染まっている庭の一隅、千両の植えられている辺りに小鳥が来ているのである。小鳥に啄ばまれた赤い実は、やがて小鳥の糞に紛れて別の場所に伝播されるのであろう。今庭に実をつけている千両の命だけでなく、別の場所で芽生えるかもしれない千両の命まで思いを馳せた一句である。

散歩の途中にでも通りかかった小学校の校庭の一情景である。「落葉まふ」という措辞によって、いかにも寒々とした風の校庭が無機的に描き出されている。しかし、これだけでは今の俳句としては不十分である。作者は課外授業中の小学生をそこに配置することによって、校庭全体に動きと生気が与えられ、生き生きとした学校風景が描かれている。「課外授業」がこの句の眼目である。

陽のあたる段に墓ありみかん山

ヤエ子

昔から、蜜柑の栽培は平地でなく、一般に傾斜地である。水利の良い平地であれば、そこは田圃として開墾され、米や麦などの主食たる穀物が栽培された。平地を利用し尽した山間地の人々の目は、山肌の傾斜面に向けられ、蜜柑や柚子、枇杷、栗などの換金用作物が植えられた。いわば、蜜柑山は狭い国土にあえぎながら、先人の知恵と汗と血で造りあげられた結晶である。

その蜜柑山の途中に狭い幅の墓地が切られ、その地域を守って来た先人の墓が建っている。その周囲に取り残されている蜜柑の実に反射する冬の陽は、先人の労苦をねぎらうように感じられる。

暮の街歩き屋餉はパスタにす

眞三

淡々と日常を詠んだ句である。暮の街を仕事や金策で駆け回ったのではない。自分の生活のペースに合わせて散策したのである。この心の余裕が「屋餉はパスタにす」というフレーズを呼んだのである。同じ軽めの食事にしても、作者は蕎麦や麺ではなく、パスタにしたのである。いずれも穀物の粉製品ではあるが、ごく自然体に「パスタ」にしたと言われると、この句には不思議な説得力が生まれる。

霜白く小石重ねて主従墓

幸

主従二つの墓があるという。しかも、それらの墓前には小石が積み上げられているという。そして、それらの小石には霜が白く残っているという。客観写生に忠実な一句であり、破綻が見られない。そこに葬られている主従の生き越し方を、「霜白く」が暗示しているようにある。

会館

文責・増田
守